

92.11.23 毎日新聞

フィールドワーク

佐藤郁哉著（新曜社・1854円）

日本の社会科学において「フィールドワーク」は、入口スト・アートVどころか、これまで技として確立されたことさえなかった」と論ずる著者の書き下ろし調査論。「恥知らずの折衷主義」、異なる方法からの「三角測量」の重要性、「方法を知ること」と「内容を知ること」の差異、「一歩距離を置いた関

与」と、内容は豊富。しかし科学という隠れ蓑を求めて読まれるのは本意ではなからう。理論屋・文献屋・調査屋・統計屋などに分かれ「党派的」な対立に病む社会の学を、調べ書く現場から変えてゆくことこそが、この著者の野心だからである。

手引きではない。頭の方を引っぱりこもうとする。そしてサーベイ屋やテスト屋が陥りがちな安易さを批判し、仮説の設定や概念の洗練に拒否反応をしめすフィールドワーカーの怠慢を戒め、いい気なエスノ・エッセイストをたしなめる。読後にはまず元気を出そう、ということばをそえて、悩める大学院生諸君に読ませたい。

（健）